

F-24 中年主婦層に対する質問紙法による健康調査
—有職者と専業主婦の健康状態比較—

長崎女短大 ○湯川 聡子
精華女短大 井上 洋子

1. 最近、出産年齢にある勤労女性において、妊娠・出産に伴う障害の多いことが報告されているが、妊娠・出産を終った中年女性に関しては、職業生活の健康に及ぼす影響は未だ知られていないことが多い。アメリカにおいては、ひまになり、生き甲斐を失った郊外居住の主婦の間に精神的原因による各種の病気の訴えが増えているという報告もみられる。我国において果してそのような現象が存在するのかどうか、専業主婦と有職主婦の間に健康状態の違いがあるのかどうかを知ろうとして質問紙法による調査を行なった。

2. 調査票は大量調査によく利用されている Conell Medical Index を基礎とし、専門医の協力を得て中年女性に適当な 130 問の質問に作成し直したものをを用いた。対象は福岡市郊外住宅地である香椎地区の主婦と職場単位に選んだ主婦（小学校教員，保険局事務員，電話交換手）で、合計約 700 人。35歳以上で夫と子供があり、老人や 5 歳未満の乳幼児が家庭にいない女性に限った。

3. 130 問の症状について自覚症状ありと答えた数の合計を比較すると、専業主婦は平均 18.8，有職主婦は平均 25.3 と統計的有意差を示している。すなわち、本調査においては、共働きの中年主婦は専業主婦に比べて明らかに病的症状の訴えが多く、健康を損なっている度合いが強い。家庭と職業の二重の役割からくる多忙のために疲れているという結果が明らかにされた。